



ちひろ・愛の物語

●9月26日(金)～11月30日(日)

いわさきちひろは、その作品のなかで、「愛」をテーマにした童話や小説の世界を、美しい色彩と画面構成で、情感豊かに描き出しています。

『ふたりのぶとうかい』——恋の喜び

1968年に描かれた『ふたりのぶとうかい』は、ウェーバー作曲の「舞踏への勧誘」のイメージをもとに創作された絵本です。貧しい少年と屋敷に住む少女とのほのかな恋の物語が、見開き毎の色調や構図の大胆な転換と、画面の流れの変化によって、ドラマティックに展開します。

芝生の庭に舞い込んだ少年の前に、女の子が現れる冒頭シーン(図1)。二人の視線が交錯した瞬間、心惹かれあうイメージが、緑一色の背景に白い人影を配した鮮やかな色彩の対比によって、印象強く描かれています。二人が手を取りあい夢中になって踊り出す場面(図2)では、ピンクと黄色のバラが大きく描かれ、音楽も中盤の盛り上がりへと進んでいきます。華やかなワルツの調べとともに、初々しい二人の胸の高鳴りが、画面を通じて感じられるようです。

『にんぎょひめ』——届かぬ想い

「百年もの年代の差をこえて、わたしの心に、かわらないうつくしさをなげかけてくれるアンデルセン——」*1。アンデルセンの物語を愛し、数多くの作品を手が

けたちひろ。なかでも、人魚姫の人間の王子に対する叶わぬ恋を描いた『にんぎょひめ』は、現在確認されている1953年、34歳のときに手がけたものを初めとして、以降少なくとも5回は絵を描いています。

深い海の底から、人魚姫が王子に一途な想いを寄せる場面(図3)では、海の色を湛えたような碧い瞳や、指先の表情の細やかな描写によって、15歳の姫のひたむきな願いが、叙情的に物語られています。アンデルセン童話を、「いまの社会につうじる、同じ庶民の悲しさをうたいあげ」たと賞し、「なんかいかいて、なお工夫するたのしさを、わたしはいまだに失なわないでいる」*2と語ったちひろ。人間の本質を鋭く捉えた、哀しくも美しい物語『にんぎょひめ』の絵は、ちひろの内面で繰り返しイメージ化されることで、説明的な要素を抑えて人物の心情を深く描き出す、繊細で普遍的な表現へと、歳を重ねるごとに発展していきました。

『たけくらべ』——叶わぬ恋

明治20年代の東京・竜泉寺町界隈。下町に生きる思春期の少年少女の日常を、四季の移り変わりとともに美しく描き出した、樋口一葉の『たけくらべ』。1966年以降、「若い人の絵本」シリーズを手がけていたちひろは、6作目のテーマに、少女時代からの愛読書である『たけくらべ』

を選んでいきます。

遊女の姉をもつ14歳的美登利は、僧侶となる定めへの信如に淡い恋心を抱くものの、信如は一輪の水仙を残し立ち去ります。表紙のために描かれた「美登利」*3は、彼女が桃割れの髪を解いて、大島田を結び、大人にならざるを得ないことを自覚した日の姿です。背後の闇にやがて花魁となる運命が暗示されているようですが、その表情は毅然としています。この美登利像には、「われは人の世の痛苦と失望とをなぐさめんために生まれ来たる詩の神の子なり」と、極貧生活や悲恋を経験しながら誇り高き精神を失わず25年の生涯を全うした、一葉自身の生き様も重なって映るようです。ちひろは、『たけくらべ』の作画に取りかかる前、編集者と一葉記念館を訪ねました。また、没後、未使用の下絵が多く発見されており、この作品にかけた思いの深さを伺わせます。

ちひろは、いくつかの愛の物語を通して、いつの時代も変わらぬ人が人を恋うる気持ち、愛する想いをみずみずしく表現しています。本展では、物語絵本のほか、「ゆびきりをする子ども」等、友愛や母子愛を描いた作品も、あわせて紹介します。

(屋代亜由)

*1・2 「童画とわたし」1964年

*3 「表紙の作品」参照

●展示室4

ちひろ美術館コレクション画家展Ⅲ ヤナ・キセロヴァー・シテコヴァー

●9月26日(金)～11月30日(日)

今年、66歳を迎えるスロヴァキアの女性画家、ヤナ・キセロヴァー・シテコヴァーは首都ブラティスラヴァの中心部、伝統的な街並みの一角にある集合住宅の中にアトリエを構え、大学教授の夫と暮らしています。幼い孫について愛おしく話す彼女は、子ども時代に、医者のお父さんが買ってきたさまざまな美しい本の絵と文章がきっかけで、絵本に興味を持ったといいます。家のなかで、たくさんの本に囲まれて幸せな子ども時代を過ごしたと語るキセロヴァーの絵は、まるでその記憶を再現するかのように、少女の心のなかにあるファンタジーを見事に描いています。彼女の作品は、スロヴァキア以外の国ではあまり知られていませんが、その魅力は、緻密な筆づかいによる、童話のもつ叙情性の丁寧な表現。また、随所に現れる、女性らしい繊細さとあたたかさをもった自然描写です。

今回は、アンデルセンの『おやゆびひめ』から11点と、未発表の作品2点、そして版画作品2点を、ちひろ美術館コレクションより展示します。

『おやゆびひめ』の作品はいずれも2001年にスロヴァキアで出版された同名の絵本のために描かれた原画です。これらにより、彼女は同年、ブラティスラヴァ絵本原画コンクールの金のりんご賞を受賞しています。

キセロヴァーの描くおやゆびひめは、本当に小さく、鳥やねずみが、いかにおやゆびひめと比べ大きいかを感じ取れます。おやゆびひめの表情やしぐさは、まだまだ幼い印象を与えますが、内に強い芯をもっている様子が絵からは読み取れます。画家自身も、おやゆびひめについて、「気がつかれないほど小さく無防備、しかし、とても勇敢。このことは私にとっても驚きです。」と語っています。

テンペラとインクで細かく布の上に描写された草花や動物たちは、写実的でありながら、どこか不思議なかたちをもって表現されています。登場人物、そして動物の身につける衣服や、一羽ずつ異なる鳥たちの表情からは、アンデルセンの童話とその登場人物たちへのキセロヴァーの愛情が感じられます。絵本のなかの冬の場面では、編集者は、子どもの本に、死んだ鳥を見せるのを好まず、その部分をカットしてしまいました(図3)。しかし、キセロヴァーは、自然は時には厳しいもの、とつばめが寒さのなかで凍え死んでいる様子を、美しく、悲しく描いています(図4)。

キセロヴァーは1983年以降、絵を布に描く試みにより、彼女特有の世界を広げています。ちひろ美術館初公開となる作品の数々をお楽しみください。

(松方路子)



図3 王子を想う人魚姫 『にんぎょひめ』より 1967年



プレゼント 1969年



図1



図2



花の国の王子とおやゆび姫
『世界名作えほん全集14おやゆび姫』より 1966年

図1・2 『ふたりのぶとうかい』より 1968年



図1



図2



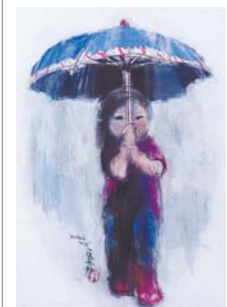
図3



図4

～同時開催～

一ちひろ美術館コレクション
世界の絵本画家展Ⅲ
29カ国187人の画家
による約26,300点の
作品の中から、約80
点を展示します。



八島太郎 (アメリカ)
かざを持つモモ
『あまがさ』のイメージ 1965年

ちひろ・愛の物語 一夫・善明との歩み^{ぜんめい}

本展では、自伝的絵本『わたしのえほん』やスケッチ、遺品などから、ちひろと夫・善明の歩みを紹介します。

『わたしのえほん』——出会い・結婚

1949年の夏、神田の共産党の細胞会議の席上で、ちひろは翌年結婚することとなる松本善明と出会いました。「僕は一生お金のたくさん入るような仕事にはつかないつもりなんです」。善明が語った言葉は、ちひろの心に深く残ります。ちひろが7歳半年上で、かつて不幸な結婚の経験があることも知った上で、善明はプロポーズし、1950年1月、二人は結婚しました。1969年に描いた絵本『わたしのえほん』の中で、ちひろは結婚した日のことを、「四面楚歌のなかでの二人だけの結婚式」と記しています。当時住ん

でいたブリキ屋の2階の部屋をたくさんの花で飾り、1本のワインで祝ったささやかな結婚式を、ちひろは少し緑がかった茶色のにじみのなかに、花々と2つのグラスを白抜きで浮かび上がらせて描いています。自ら決めた愛する人との結婚、その結婚への希望や不安……。当時感じていたであろう、ちひろの心の揺れ動きが感じられます。

白骨温泉スケッチ——新婚旅行

日本共産党の路線上の混乱から、突然職を失った夫を誘い、1950年6月、ちひろは長野県の白骨温泉を訪れています。この旅行は二人にとって、事実上の新婚旅行となりました。北アルプスの山々や林道、温泉に入浴する夫の姿など、旅先でのスケッチからは、夫と二人で過ごす

時間を楽しんでいたちひろの姿がうかがえます。

日記・原稿——暮らしのなかで

1950年代前半に書かれた日記「わが愛の記録」のなかで、ちひろは、「三十年來私はいかに人を愛したことはない」と記しました。それから20年、夫や家族との暮らしを経て、ちひろは「大人というものほどに苦勞が多くても、自分のほうから人を愛していける人間になることなんだと思います」と語っています。この言葉からは、人を愛する喜びや苦しさを経験し、画家として、人として、成長していったちひろの足跡が感じられます。

20年以上にわたり、ちひろが夫とともに歩んだ軌跡をご覧ください。

(宍倉恵美子)

松川中学校図書委員会 夏休み活動報告

地元・松川中学生が、展示解説や体験コーナーのサポートをする夏休みの展覧会ボランティアの活動も7年目を迎えました。今年はこの活動に加え、図書委員が、夏休み期間中、4日間計8回のおはなしの会を行いました。

最初は、中学生同様、緊張気味の子どもたちでしたが、いつしか絵本に引き込まれるように聞き入っていました。このおはなしの会が、参加した子どもたちにとって、絵本の楽しさを知り、さまざまな絵本と出会うきっかけになれば、と思います。

この活動は、中学校からの希望で実現したものです。学校と連携した活動が徐々に定着し、美術館がより身近になったことを実感しました。今後も地域や学校とともに、人々が楽しめる場としての美術館での活動を継続し、また発展させていきたいと思っています。

(柳川あずさ)



中川美保サクソフォンコンサート

●7月27日(日)

夏休み最初の日曜日、豊かなサクソフォンの音色が響き渡りました。演奏者は、国内外で活躍中の中川美保さん。安曇野ちひろ美術館と中川さんとは、2001年に平和コンサートをして以来のおつきあいです。

日中に行われたギャラリーライブに続いて、夕方からは、松川村・九条の会との共催で、コンサートを開催しました。クラシック曲やシャンソンに加えて、「未来に平和と愛があふれることを祈ります」の言葉とともに演奏された日本の歌曲、「長崎の鐘」「さとうきび畑」は、とりわけ強く心に響きました。親しい日本の歌に、一緒に口ずさむ人も。参加者からの「平和だからこそ音楽を楽しめることを実感しました」との言葉が心に残りました。

(入口あゆみ)



ちひろと帽子



夫・善明と 花模様を描いた帽子を手に
1950年

「ボンネットをかぶって、ふわふわとした洋服を着て、なんともいえないやわらかな雰囲気の方で、十八、九の少女のようにみえました」*1「ハルジオンの白い花の丈高い草むらの間を、前を歩いているちひろさんの帽子の白いリボンが微風にかるやかにゆれておりました」*2。生前のいわさきちひろを語る時、帽子をかぶっていた姿を、口にする人が多くいます。

ちひろのアルバムを開くと、旅先で、あるいは日常の風景のなかで、さまざまな種類の帽子をかぶったちひろの写真が、多く残されています。それは、幼い頃も同様で、新しい感覚を持った母・文江の影響を受け、ちひろは、まだ流行ら

ないうちにベレー帽をかぶるなど、自分なりのコーディネートを日頃から楽しんでいただいています。

美しいもの、かわいいものが本当に好きだったちひろ。戦後には、つば広のベージュ色の帽子を買ってきて、ふちに油絵具で花模様を描き、かぶることもありました。また、女学生時代から変わらない横分けのおかっぱ頭で、「首から上のオシャレとなると帽子にたよらざるをえなかった」*3ことも、ちひろが帽子をよくかぶった理由のひとつなのかもしれません。

ちひろの絵に登場する子どもたちも、たくさんの種類の帽子をかぶっています。麦わら帽子、バラ飾りの帽子、ニット帽……。絵の

中の帽子は、色彩や形象のアクセントとなって、画面上に彩りと雰囲気添えるほか、季節を感じさせたり、うしろ姿の子どもにかぶせてその表情を見る者に想像させたりもしています。ちひろは絵を描くとき、「この子は何色の洋服が似合うかしら、靴は、帽子は……」などと絵のなかの子どもに語りかけながら筆を進めたといえます。ちひろは、心のなかの子どもたち一人ひとりの個性に合わせ、色柄・素材・形を選び、帽子のおしゃれで着飾りました。

*1 「座談会」いわさきちひろさんへの
1974年

*2 東本つね「つば広の帽子とちひろさん」
1982年

*3 松本猛「ちひろのひきだし」1983年

ちひろを 訪ねる旅②

ヨーロッパ旅行2 フランス・パリ



パリにて 旅行団の一員と、母・岩崎文江(右)

1966年3月31日、いわさきちひろと母・文江は、旅行団の一行とともに、朝9時45分にコペンハーゲンを発ち、ドイツのフランクフルトを経て、18時25分にフランス・パリのオルリー空港に到着しました。ちひろにとっては、ピサロやボナールなど好きな画家を通じて、また、「巴里祭」などの映画を通じて憧れた芸術の都パリ。母娘は、ここで4月5日までの5日間を過ごします。ルーブル美術館を二回訪ね、オランジェリー美術館、近代美術館をめくり、エッフェル塔やノートルダム寺院などを市内見学して、4月4日には、大聖堂で知られるアミアン、ジャンヌ・ダルクの生地である古都

ルーアンへの日帰り旅行に出掛けるなど精力的に動いています。パリで7点、ルーアンで6点と描かれたスケッチは多くはありませんが、それらの作品からは、ちひろの視線が、パリでは人びとに、ルーアンでは町のたたずまいに注がれていたことがわかります。また、残されたスナップ写真には、パリの街角やサントチャペルが美しいアングルでとらえられ、画家の感性がうかがわれます。一方、文江の旅の日記からは、宿泊したホテルGarge Citoroenの部屋が悪く、変更を希望したけれど叶わなかったことや、パリの焼き栗より日本の甘栗のほうが美味しいといった雑感が、細かな行

動記録とともに記されています。地下鉄の紙くず多きパリの町文化都市とは驚かれぬる世界中の芸術家たちが憧れる花の都パリ。その実相は、現実的で辛らつな文江の目には、この歌のように映りました。4月5日、パリでの最終日を母娘は荷造りをしたり、日本に手紙を書いたり、買い求めた本を発送したりして過ごしました。この日、ちひろは郵便局からの帰り道、画材屋に寄って、絵の具を買い求めています。ちひろ愛用の絵の具の中には、フランスのルフラン&ブルジョワ社の絵の具もありました。(竹迫祐子)

ひとこと ふたこと みこと

7月25日(金)
『戦火のなかの子どもたち』の小さな子を抱き、にらみつけるような母の顔がとても印象に残りました。「戦争をしてはいけない」と子どもたちに語り継がねば……と思います。(高槻市 稲垣多友子)

7月26日(土)
にじみをとともきれいにすることができて、おじいちゃんに「上手にできたね、君はいわさきちひろ二世だ!」と大きな声で言われて照れました。(静岡市 小林優莉佳)

8月3日(日)
いわさきちひろさんの絵はもちろんですが、西村繁男さんの『絵で読む広島原爆』という絵本はすごかった。昨夜たまたま原爆をとりあげたTVを見ていたので、なんだかめぐりあうかのように手に取りました。

戦争はいけない、と改めて強く思いました。何回もこちらには来ていますが、一番ゆったりと見えています。水彩体験もすごく楽しかったです。(思うようにできないところがまたよかった!) ボランティアの中学生の皆さんも頑張ってください。(川崎市 鈴木悦子)

8月19日(火)
絵本の歴史もとても興味深く、重ねて人間の文化の歴史をひしひと感じました。また、ちひろさんの原画、小さな小さな空間から“平和”と“生きる”が美しく心にせまりきて、強く感動しました。本当に心揺さぶられる美しい美術館でした。

宇都宮美術館「わたしが選んだいわさきちひろ展」感想ノートより

8月2日(土)
小さな子どもたちがたくさんいる美術展は、初めてでした。不思議ですね。さわりだりする子がいないんです。ベビーカーにのっているあかちゃんも泣いたりしない。むしろ「ママ!! きれ〜い!」と指さしている男の子がいて、私も思わず「お母さん! かわいいネ」と言ってしまいました。とてもあたたかい気持ちになりました。

8月5日(火)
7歳の息子がお腹のなかにいるときに主人とちひろ美術館を訪れ、そのときの懐かしさが思い出されました。今では言うことをきかない息子に手を焼いています。でもこのたくさんさんの絵をみて、子どもに対するちひろさんの愛情に、今のままではいけないと考えさせられました。ありがとうございました。



美術館 日記

6月21日☁
日本の名画上映会で「鞍馬天狗 鞍馬の火祭」(1951年制作)を上映。松川村のご年配の方々が、大勢参加された。杉作役の美空ひばりの歌声に、当時を懐かしむ声が聞かれる。また、河崎義祐監督の、映画の魅力や裏話を語るミニトークも、「監督のスピーチと共に観る映画が楽しい」と好評。

7月15日☀
6月に松川村のボランティアの方々が1万2000株のブルーサルビアを定植。3000㎡の大花壇に、満開の青い花が広がる。大花壇が青一色に染まるのは初めて。猛暑の中、松川中学校の1年生がボランティアで草取りを行ってくれた。

7月26日☁
宇都宮美術館での「わたしが選ん

だいわさきちひろ展」(7月26日~8月31日)が初日を迎えた。栃木県で初めての館外展である本展は、県下の皆さんと一緒に作る展覧会。開催に先立ち、ちひろの作品へのリクエストとメッセージを募集したところ、宇都宮市内の小、中学生を中心に2149件もの応募があった。寄せられたメッセージの一部は、ちひろの作品と併せて展示。夏休み期間中ということもあり、館内には親子連れの姿が目立ち、絵の前で楽しそうに語らう姿が見られた。また初日には、松本猛館長による記念講演会を開催。ちひろの絵の魅力や楽しみ方、母ちひろの思い出などを語り、170名の参加者が熱心に聞き入った。

7月31日☀
カフェの屋外に、長野県の家具作

家による木製のシーソーを設置。子どもたちに大人気となる。楽しそうにシーソーに乗る子どもたちの姿が、微笑ましい。

8月9日、10日☀
7日目となるアートラインサマースクール。2日間かけて、松川村公民館と武蔵野美術大学とともに、ワークショップを開催。幼児から大人まで、27名が参加した。今年は学生たちのために、西原公民館が宿舎として提供され、期間中、学生と美術館スタッフが自炊することに。そこで、公民館が松川村の方々にお野菜ボランティアを募集したところ、採れたての夏野菜がたくさん届けられた。地域をあげての活動に、松川村の多くの方々が関わってくださったのは、うれしい限り。



●『みんなほんもの』刊行記念

相田みつを&いわさきちひろコラボレーション展開催

本展は、詩画集『みんなほんもの』（ダイヤモンド社）の刊行を記念して開催する、相田みつをの詩と、いわさきちひろの絵（ピエゾグラフ作品）による二人展です。画家と詩人、それぞれがみつめた自然、子ども、生命、そして、未来。ふたりのアーティストがともに創り出す世界は、現代を生きる私たちに、多くのものを語りかけてきます。

（両館同時開催）

安曇野ちひろ美術館〔多目的ギャラリー〕 9月26日(金)～11月30日(日)

相田みつを美術館〔第2ホール〕 9月2日(火)～12月14日(日)

●新刊紹介

『みんなほんもの』

相田みつを・いわさきちひろ著
いのちの大切さを優しく伝える、
“お母さんのための絵本”。売上の
一部はユニセフに寄付され、世界の
子どもたちのために使われます。

発売日：2008年9月1日

定価：1260円（税込）

発行：ダイヤモンド社



●安曇野館イベント予定

●安曇野スタイル2008

4回目の今年は、李朝家具（ギャラリー羅山）、土の器（平林昇氏）、竹の籠（吉田佳道氏）の作品を安曇野の野の花とともに展示、販売。11月1日、2日には、器や籠をつくるワークショップも開催します。

○日時：10月31日（金）～11月3日（月）

○ワークショップ日時：

11月1日（土）、2日（日）

○参加費：ワークショップのみ

●秋の夜長の安曇野寄席

秋の夜長のひとときに、日中とは少し雰囲気の違いある美術館で寄席をお楽しみください。

○日時：10月19日（日）18：00～

○出演：遊興亭福し満・三遊亭時松ほか

○定員：80名※定員になり次第締切

○参加費：無料

（館内を見学する場合は要入館料、要申込）

●chihiro cinema

ちひろが愛した映画上映会

ヨーロッパや日本の古きよき映画を、河崎義祐監督のお話とともに楽しみください。

○日時：11月15日（土）14：00～

○定員：80名※定員になり次第締切

○参加費：無料（入館料のみ、要申込）

●絵本作家 武田美穂のワークショップ・対談

『となりのせきのますだくん』でおなじみの気鋭の絵本作家、武田美穂さんによるワークショップと対談を2日間にわたって開催します。ワークショップでは、みんなで一緒に自分たちだけの町をつくりまします。作家本人による絵本の読み聞かせも。対談では、武田美穂さんと、安曇野ちひろ美術館館長の松本猛が、自分の絵本とその表現方法、影響を受けた絵本や映画、マンガ等について大いに語り合います。

●10月4日（土）

ワークショップ～みんなでつくろう！ぼくたち・わたしたちの町

○会場：生涯学習センター「グリーンワークまつかわ」

○対象：小学生

○定員：30名

○参加費：材料費として800円

○申込：松川村公民館

（TEL：0261-62-2481/FAX：0261-62-2494）



武田美穂

1959年東京都渋谷区に生まれる。父は脚本家、母は女優という映画一家で育つ。86年『あしたえんそく』でデビュー。91年の『となりのせきのますだくん』（講談社出版文化賞、絵本にっぽん賞等）により広く名を知られる。絵本その他、イラストレーション、人形やキャラクターデザイン、アニメーションの分野でも活躍中。

●10月5日（日）13：30～

対談 武田美穂×松本猛

○会場：安曇野ちひろ美術館／

多目的ギャラリー

○定員：80名

○参加費：500円

○申込：安曇野ちひろ美術館

（TEL：0261-62-0772）

※定員になり次第締切

●おはなしの会

毎月第2・4土曜日11：00より
絵本の読み聞かせや素話を、親子でお楽しみいただけます。どなたでもご自由にご参加いただけます。

●絵本相談室

毎月第2・4土曜日11：30より
絵本に関する相談や、絵本選びのアドバイス等、絵本に関するお問い合わせを承ります。

●ギャラリートーク

毎月第2・4土曜日
13：00～/14：00～
展示室にて、作品の解説や展示のみどころ、絵の楽しみ方などをお話します。（参加自由）。

●新商品紹介

ちひろバッグ

マチとポケットがつき、ビニールコーティングされた丈夫なバッグ。

「バラ飾りの帽子の少女」の絵柄が新登場。日本製。（定価3,675円）



●ちひろのベトナム語版絵本出版記念企画

ちひろとベトナムの子どもたちを訪ねる旅

○10月19日（日）～10月25日（土） 198,000円

募集定員30名（最少催行15名）

添乗員同行（成田―ハノイ②―ホーチミン市③―成田）

○企画・問い合わせ 富士国際旅行社

TEL：03-3357-3377/FAX：03-3357-3317

- 旅 ・『戦火のなかの子どもたち』『母さんはおるす』ベトナム語版の出版記念集に参加します。（ベトナム女性同盟、子ども基金の皆さんも出席）
- 特 ・ツアー一病院内のホーチミン市平和村を訪問します。
- 色 ・『母さんはおるす』のモデルとなった人々と交流します。

●冬期休館のお知らせ

2008年12月1日（月）から2009年2月28日（土）まで、安曇野ちひろ美術館は冬期休館とさせていただきます。2009年の開館は、3月1日（日）からとなります。

<展示紹介> ちひろ・愛の物語／ちひろ美術館コレクション画家展Ⅲ ヤナ・キセロヴァー・シテコヴァー…②③

<活動報告> ちひろ・愛の物語―夫・善明との歩み―／松川中学校図書委員会 夏休み活動報告／

中川美保サクソフォンコンサート／ちひろと帽子…④

ちひろを訪ねる旅②／ひとことふたことみこと／美術館日記…⑤

CONTENTS

美術館／友の会だより No.53 発行2008年9月26日

●安曇野ちひろ美術館